



ライティングの採点方法から見た指導と評価

根岸 雅史 Negishi Masashi
(東京外国語大学)

1. ライティングの採点が減点法なわけ

ライティングの採点にはどのような方法があるだろうか。言語テストに関する文献を見てみると、およそ2つの採点方法を中心に解説されていることが多い。1つは全体的採点であり、もう1つは分析的採点である。前者には、5段階ならABCDEをただ単に印象で決める、いわゆる「印象採点」と、それぞれのレベルの特徴を記述した採点基準をもとに行う採点とがある(ただし、採点基準といっても、それぞれのレベルの一般的特徴がまとめて書かれているだけである)。これに対して、分析的採点方法では、語彙・文法・内容・構成・綴りというような様々な観点について、それぞれ個別に判断していく。

しかし、日本のライティングの採点でもっぱら用いられているのは、これらのいずれでもなく「減点法」である。上述の採点方法のうち、特に分析的採点方法は、言語テストの文献では一般的でも、英語教育の現場の認知度はきわめて低く、知られていたとしても、実際に使われる頻度はさらに低い。

こうした現状にはいくつかの原因が考えられる。1つの大きな原因は、海外に比べ、自由度の高いライティング・テストの課題が少ないということである。つまり、日本におけるライティング・テストの課題のほとんどは、和文英訳であって、書くべき内容が規定されているのだ。このため、書けていない部分や間違えている部分を減点していく採点方法が採用される。もし書くべき内容が規定されていなければ、この減点法はうまく機能しないはずだ。また、書かれた内容や構成に関して、主観的な判断を避けていることも、分析的採点が行われない原因となっていると言えるだろう。さらに、仮にいわゆる「自

由作文」が課されていたとしても、書かせる量がきわめて少なく、分析的採点の各観点の判断を行うに足るだけの情報が確保されないという原因もある。

2. 作文の分量について

世界の様々な能力記述を見ると、日本の中学相当と思われるレベルの「書くこと」の記述が、かなり高レベルに感じる。日本の中学のテストでは、複数のパラグラフを書かせる課題はほとんどないが、海外ではこの段階でも複数パラグラフの文章を書かせるのが、当然の到達目標のようである。

日本には、本当の意味での英語教育のグランド・デザインがない。そのため、ライティングの力をどう伸ばすかについて、英語教育に関わるものがみな同じイメージを持っているわけではない。ライティングの能力をどう伸ばすかについては、中学段階で正確さを優先するのか、あるいは量をたくさん書かせることを優先するのかという議論が重要だと思われる。現在、日本の中学校におけるライティング・テストを見ると、明らかに正確さを優先している。しかし、エッセー型のテスト結果を分析すると、あるレベルに至るまでは、学習が進むにつれて書ける量が確実に増えていくことがわかってきている。ということは、初期段階で優先すべきなのは、正確さよりも量なのではないかという気がしてくる。

日本の英語教育が正確さを重視してきた背景には、客観的に採点しやすいということがある。実際、客観的に(または、公平に?)採点することを重視するあまり、客観的に採点できないものは出題しなくなってしまっているのが現状だろう。客観的に採点するということは、採点の信頼性を重視しているということであるが、そのために測るべき能力を

測っていないとなれば、これは妥当性を犠牲にしていることになる。一方、音楽や書道や美術などでは作品の評価を主観的に行っていて、これをほとんどの人が当たり前だと思っている。ある意味では、どのような内容の文章がいいとか、どのような構成の文章がいいということも、主観的に判断する性質のものである。これらを重要なことと考えるならば、テストでも見ていかなければならない。

採点の客観性重視の傾向は、テストの学習への波及効果の問題にもつながっており、より深刻である。テストでまとまった量のライティングを課さないで、まとまった文章を書く練習が行われなくなってしまう。採点の客観性への意識は、入試ともなればより強くなり、結果的に入試のライティング・テストの自由度と量はきわめて限定的となる。最も波及効果の高い入試というテストにおいて、自由度のある、まとまった量の英文を書かせる課題が課されないとなれば、受験勉強の中から「自由作文」が消えていくのも当然だろう。

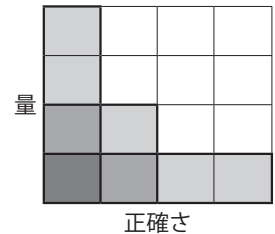
3. 分析的採点の新しい提案

個人的には、日本の中学段階の英語教育が、もっと量をたくさん書かせることにシフトしてもいいのではないかと思う。その上で、採点の客観性のある程度高めたいということであれば、書いた単語の数や行数だけで採点してもいいかもしれない。もちろん、単純に量をかせぐために同じ文をいくつも書いたり、中身や構成をいい加減に書いたりする生徒もいるのではという懸念がある。量を優先するなら、まずはこうした作文を認めるようなところから始めてもいいと思うが、これが本当に問題であると認識するのであれば、中身をざっと確認し、大きな問題がなければあとは量だけで採点してしまうという手もある。量だけで採点するので、採点は客観的である。もちろんこれは学習の初期段階の話で、ある程度のまとまった量を書けるようになったら、その上で正確さを求めていくべきだろう。

まとまった量を書かせれば、もちろん分析的採点を導入することもできる。ただ、この採点方法を導入した場合に悩ましい問題がある。それは、「文法」や「語彙」というような観点を立てた場合、「少し

か書いていないが、正確なもの」と「たくさん書いてあるが、誤りもたくさんあるもの」のどちらを高く評価するかという問題である。

上のような場合の採点で私が提案したいのは、「面積でとらえる」という方法である。この場合の面積とは、「量」と「正確さ」を4段階などで判断し、縦軸に「量」、横軸に「正確さ」として掛け合わせたものである。たとえば、下の図でいえば、「少ししか書いていない(量1)が、文法が正確なもの(正確さ4)」は、縦軸が短く横軸が長い長方形となり、これに対して「たくさん書いてある(量4)が、文法の正確さの低いもの(正確さ1)」は、縦軸が長く横軸が短い長方形となる。どちらも面積は4となり、これは「量」「正確さ」とも2の場合と同じ面積だ。もし「量」と「正確さ」の重み付けを変えたいければ、重視する方の目盛りを大きくすればよい。



もちろん、分析的採点においては、「文法」や「語彙」といった各観点の下位観点の1つである「量」は、「バリエーション」とする考え方もあるだろう。この場合は、単に量がたくさんあるかどうかではなく、どれだけ多様な文法形式や文型を使っているかが問題となる。つまり、同じような文型の文を羅列しても高い評価を与えないというものである。

おそらく定期試験の実際の採点場面では、こうした採点方法ではば問題ないと思われるが、受験者の能力幅の広い大規模テストなどの場合は、答案に現れた文法項目や文型などが示唆する発達段階上のステージによって割り振る点を変えたいという選択肢もあるだろう。文型でいえば、SVCとSVOを使っているよりは、SVOOとSVOCを使っているほうがレベルが高いと判断するという具合である。

「長い自由作文」を課しても、それに応じた採点方法はあろう。だとしたら、思い切って出題してみてもどうだろうか。しかし、その前にまとまった量の英文を書かせる指導を始めるということが大前提である。指導と評価は一体化しなければならない、ということである。